**花房貞夫先輩を偲ぶ**

**久保田　紀彦**

**花房先輩が２０２１年１０月１７日に急逝された。征江奥様からのご丁寧なお手紙で訃報を知った。その知らせには「花房さんのたってのお願いで、１０月１９日にご家族のみでの音楽葬をされた」という。彼らしいスマートで静かな人生の終焉であった。彼の音楽を愛する随筆を何回も「水晶」で接し、そのたびに感動していた。大変貴重な人材を失い、虚しさが込み上げてきた。水晶で投稿される随筆の内容の多くは、日本の音楽にまつわる逸話が多く、童謡、校歌、クラシック音楽が話題の中心であった。花房先輩と過ごした時をふりかえるとともに、関連する思い出話を綴ってみた。**

**「おい久保田、元気にやっとるか？」と花房さんが柔和な瞳で肩越しに呼びかけて下さっていた姿を思い起こす。「・・ださ」「それでさ・・・」、信州弁は「・・ださ」と「さ」を多く使う。花房さんは私と同じ信州の上田高校出身で彼は2年先輩である。会話にはお互いに信州弁がよく出るので、特に親しみを感じていた。生れも私と数十ｋｍしか離れていないところで、私は上田市で、彼は御代田町から信越線で上田高校に通学されていた。クラ研ではたった一人の２年先輩の部員であった。彼の容貌は歌舞伎俳優が髪型を脱いだようないい男で、笑顔が絶えない人であった。髪はいつもオールバックで、清潔で几帳面な容姿が目に浮かぶ。彼は上田高校時代に全国高校総体の棒高跳び種目で５位になったアスリートで、文武両道の人であった。ゴルフが好きで亡くなる３週間前までプレイをされていたという。あっけない人生であったが、考え方によっては本人もご家族も病気で苦しむ時間が少なく、幸せであったのかもしれない。私は２０１７年１１月末の金沢でのクラ研懇親会の後にゴルフを初めてお供する予定であったが悪天候のため中止になったのが大変心残りである。花房さんと直接面会できた最後の時であった。**

**花房先輩の下宿に一度だけ数人のクラ研仲間と伺ったことがあり、今でも鮮明に覚えている。浅野川沿いの映画館街の一角の家の二階にお部屋を構えておられ、浅野川と卯辰山が窓越によく見え、すがすがしい気分であった。室内にはきれいに整理された本が棚にあり、大変几帳面な方であることがすぐよみ取れた。その時、美味しいお茶とお菓子を頂き、クラシック音楽をレコードで聴いた記憶はあるが、音楽の題名は覚えていない。**

**信州弁しか使ったことがない私は、金沢大学に入って友人との会話がスムーズに行われないことが何度かあり、戸惑った。初めて一人で路面電車に乗って金沢駅から武蔵ケ辻駅で乗り換えて野町方面に行こうと、ここで降りるのか、このまま乗っているのか、電車の車掌さんに問うたところ、何を言っているのかさっぱり判らず閉口した。車掌さんが私の袖を引いて、ここで降りて3番線に乗り換えろと指示されるまでに相当な時間を要した記憶がある。これは大変なところに来てしまったと途方にくれた。大学に行けば、「・・・がや」「・・・がや」とガヤガヤ大騒ぎする同級生が多く、少人数の関東弁の同級生との会話　　　で安心していた。特にクラ研では花房先輩のほか長野県出の増澤さん、静岡県**

**出の勝俣さんらとの会話が判り易かった。当然、私の伴侶も新潟県の上越市出**

**で、きれいな、ハキハキした関東弁を使っていた。彼女とは教養部での合同授業が多く、私は文学や心理学などサボりまくっていたので彼女のノートを借用して教養部の試験をパスできた。何人かの同級生も彼女のノートの恩恵を受けて試験をパスした。**

**クラ研でカップルになり、ゴールインした相手は、皆同じような言葉を使ってしゃべる方々であった。増澤－勝俣さん、私共は関東方面で、他の方々は北陸出身者同士が多かった。話の雰囲気、内容、習慣、料理の種類や味などが共通であり、安心して生活できるからであろうか。正月のおせち料理、雑煮の作り方など地方独特のものがある。花房さんは大学卒業後すぐに地元の銀行に就職された。奥様はきっと信州の方だろうと想像しているので、生活はスムーズに行われたものと思う。花房さんが愛した小関裕而の朝ドラ「エール」の場面で、新婚時代に福島市生まれの「裕一」が「納豆」を好んで食べまくっていたのを「音」が嫌がってみていたのと、豊橋市生まれの「音」が「八丁味噌」ばかりを料理に使用していて「裕一」が食べたくないと怒っていた画面は印象的であった。私は名古屋の友人から「八丁味噌」を沢山頂いて食べたことがあるが、「旨い」と感じたことはなかった。**

**家内は海に近い所で育ち、新鮮な海産物をいつも食べていたので、私のような山育ちでは知らなかったもが多く、今でも食べ物が合わない時がある。私は缶詰や干物の魚類は美味しいと思うのに、家内は好まない。私が大変美味しいと思う「凍み豆腐・高野豆腐」を家内は嫌いだという。**

**会話の雰囲気も関東人と北陸人では大きな違いがある。明確に表すのは難しいが、北陸人はジメっとした会話をするが、関東人はカラッとした会話をする。言葉つきは、関東人は明瞭であるが、北陸人は不明瞭な人が多い。私は言葉がキツイと北陸人に嫌がられたことがある。たまに高校や中学の同級会に出席すると会話の雰囲気がガラッと変わって安心感がある。私共の子供は全員金沢市育ちで、皆北陸人の雰囲気である。遺伝よりも風土が人格形成に関係していることを証明している。成人になってからは、職種が関係するようである。現代の日本人は外国人との国際結婚がみられるようになり、一流のアスリートが何人も誕生している。プロテニスの大阪なおみ、プロバスケットの八村塁、大相撲の御嶽海、高安、プロ野球のダルビッシュ有、陸上短距離走者のケンブリッジ飛鳥、サニブラウン・アブデルハキームなど日本人のDNAが混じって活躍している。混血が素晴らしい運動能力を産む好例である。彼等の両親は言葉や習慣によく対応できたものだと驚嘆せざるを得ない。最近の考古学研究から、日本人は主に中国・東南アジア人との混血であった証拠が縄文人、弥生人からのDNA判定で判明した。日本人はもともと順応性の高い民族であるのかもしれない。１００年後の日本列島は人口が数千万人に減少するだろうと予測する学者がいる。その頃の日本人は混血がどんどん進んでいるのではないか。**

**会話で思い出したが、アメリカ留学時の英会話で、人種による英語の差異があるのには閉口した。スペイン語、フランス語、インド語を母国語とする人の英語は本当に聞き取りにくかった。反対に、彼等には日本人が使う英語は全然わからないといっていた。アメリカ人、イタリア人、エジプト人、ドイツ人の英語は聞き取りやすかった。特にドイツ人の英語は最も判りやすい。イギリス人の英語は会話の間で言葉が高揚し、聞き取りにくい。ヨーロッパ人は何か国語も話せる人が沢山いる。ドイツのあるバス停で会話したドイツの青年は７か国語を自由に使えるといっていた。日本語はどれだけ勉強しても判らないと嘆いていたのが印象的であった。デープ・スペクテイターのように日本語を自由にしゃべれる外人がテレビでみられるが、その能力には驚嘆する。**

**花房さんの随筆を読み直すと水晶創刊号の「銀行員だった頃」の文章が一番面白い。銀行員として働いていた時の顧客の話で、「ご隠居さん」の話はまるで落語の小話でも聞いているようなユーモアたっぷりな話で、彼の人間性を如実に表していると読み取れた。読み忘れた部員の方は是非再読をお勧めする。季刊・水晶No.2の「信時潔と校歌」では、信時潔の音楽史と金沢大学校歌を室生犀星作詞で、急遽信時が作曲した貴重な逸話が読み取れる。季刊No.5では「楽譜は蘇る」は日本の作曲家の懐かしい逸話を知ることが出来る。季刊No.6の「つれづれの記」では「追憶」として「思い出のラジオ番組」で「鐘の鳴る丘」、「笛吹童子」、「君の名は」が紹介されている。これらの思い出のラジオ番組を小学生の頃に古いラジオに噛り付いて姉と一緒に聞いたことを思い出した。作曲家「古関****裕而」のことでは、朝ドラの「エール」を先取りしたような音楽史に触れることができる。「エール」は音楽好きのクラ研部員の多くは見ていたと思う。コロナ禍で放送が延び延びになり、1年余り費やした。私が熱心に朝ドラを見たのは生まれて初めてであった。定年後の暇ができたのと音楽好きが昂じ、一日に朝と昼、土曜日の総集編も見ていた。「音」は朗らかな性格で、「裕一」は気分の差が激しい作曲家であった。「船頭可愛や」のデビューから「三浦環」のレコード吹付、「栄冠は君に輝く」の作曲と山崎育三郎の歌声が心に沁みた。作詞家は石川県根上町の「加賀大介（中村義雄）」で、北陸に住んでいた。彼は野球練習中に足を怪我して、右足の膝から下を切断（破傷風菌かガス壊疽菌に感染？）し、歩くのが大変不自由になり、野球ができなくなった。しかし、野球に対する情熱が人一倍高かったのであろう。加賀大介はこの歌詞を彼の妻の名前で応募して採用されたという面白い逸話がある。あの全国高校野球夏の大会の歌を毎年聞くたびに日本中が感動に包まれる。エールのスタッフ全員がこの歌を合唱したときは、最も高揚した忘れがたい場面である。戦争に反対しながら戦地に慰問に行き、森山直太朗が扮する藤堂靖晴先生の死に直接あい、無理やり多くの戦歌を作らされた場面も忘れがたい。「暁に祈る」「露営の歌」「若鷲の歌」「ラバウル海軍航空隊」等は戦時中日本兵が何度も歌ったと思う。敗戦で一時作曲の気力を失くした裕一は長崎で被爆して亡くなられた永井隆先生を見舞ったときに、勇気をもらい「長崎の鐘」を作曲した。藤山一郎の優美な声が一層悲しさをにじませる。また、戦争孤児の歌「とんがり帽子」は菊田一夫の作詞で、緑、赤、黄の色彩が童謡によく溶け込み、美しさと哀愁を誘う。花房夫妻は偶然に安曇野の「鐘の鳴る丘の家」を訪れたことを述懐されている。「高原列車は行く」や「憧れの郵便馬車」は戦後の貧しさを吹き飛ばす明るいメロディーで、日本中を沸かせた。その歌を岡本敦郎が明るい声で歌っていた。我が家では美声の兄がよくこの歌を聞かせてくれた。兄はハーモニカも上手であった。この頃の日本は大家族が基本で、我が家も８人家族であった。現在のように核家族で物質豊かの時には味わえない、温かみのある人間関係があったと思う。貧乏で不自由なほどお互いに我慢して譲り合う精神が生まれていたのではないか。懐かしい戦後間もない時代を再現させてくれた花房さんに感謝である。エールを振り返るため、古関裕而の歌集「古関メロディー　ベスト３０」のCDを聞きながら懐かしんでいる。**

**水晶No.7の「つれづれの記２」は「花見」と「小山作之助」の随筆である。この文面は、高田公園の桜の花見の経緯―高田出身の小山作之助の生涯―滝廉太郎とのかかわりー小山作之助が作曲したった一つ残った「夏は来ぬ」の歌詞を紹介している。花房さんの友人が上越市の潟町支店長だったことから訪れた高田公園での逸話であり、はじめから最後まで筋が通った見事な短編である。実は、家内の実家が高田公園の近くで、高校まで高田で育ち、高校時代には毎日お濠沿いの道を通ったという。私も夏には何度も訪れた場所である。高田公園城址の堀は広く、夏にはピンク色の美しい蓮の大輪の花見が出来る名所でもある。水晶No.9の「つれづれの記２」は「唱歌の四季」で、文部省唱歌を四季として「朧月夜」「夏は来ぬ」「紅葉」「冬景色」の歌詞が記載してあり、幼少時に歌った懐かしい曲である。付け加えると「朧月夜」「紅葉」は信州出身の「高野辰之」が作詞し、作曲は鳥取出身の「岡野貞一」がしている。作詞の舞台はいずれも信州北部である。また、この二人は「故郷」「春が来た」「春の小川」などの代表的な学校唱歌を世に出している。「ヴィバルデイの四季」の有名になった経緯、花房さんが「冬」を好んだことなどが記載されている。「中田喜直の四季」では「早春賦」「夏の思い出」「小さい秋見つけた」「雪の降る街を」の歌詞が掲載されており、いずれも日本の四季の代表作で中田喜直の季節に対する深い感性がよみとれる。私はいずれの曲も大好きだが、特に３回訪れた「尾瀬沼」の事を歌った「夏の思い出」は、夏になると胸を揺さぶる。その時撮った「燧ヶ岳」の写真（１９９４年８月６日）が我が家の和室に飾られている。尾瀬沼は行く度に木道の鉄釘による錆で水面が汚染されており、自然が徐々に失われている。**

**水晶No.10は花房編集委員長が「米光編集主幹が交代要員を探している」というショッキングなお知らせがあった。「季刊水晶」の終焉を予感させた。花房さんの最後の寄稿となった「つれづれの記　４」は日本人の作曲家を紹介している。（１）は「惜別の歌」で、高校までの親友２人の訃報に触れて思い出した歌のようだ。自らも同様になるとは運命のいたずらであろうか。（２）の滝廉太郎、（３）の伊福部昭（４）の早坂文雄の記事は日本音楽史に憧憬の深い花房さんならではの短編随筆である。これらの曲を機会があれば是非聴いてみたい。**

**花房さんとは信州出身同志のため、彼が勤めた「八十二銀行」に勤務していた私の親族との逸話もいくつかある。先日、花房さん主催の講習会の聴講者（従兄の子）と電話で話をした。彼は聴講した礼状を花房さんに送ったそうで、「彼だけが丁寧に礼状をくれた」と花房さんが感激していたのを覚えている。世間は狭く、「礼」を忘れてはならない好例である。８２歳で「八十二銀行」の元行員が鬼籍に入るとは偶然の一致か運命の悪戯かはわからない。奥様のお手紙から推測すると、愛する子供さん達に囲まれて「家族音楽葬」による旅立ちであった。花房さんの「静かな愛すべき音楽好きの人となり」を如実に表している。**